

Title	環流する民主主義：メルヴィルの『タイピー』
Sub Title	Generating literary currents of democracy : Melville's Typee
Author	竹内, 美佳子(Takeuchi, Mikako)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2020
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.119, No.1 (2020. 12) ,p.74- 82
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	巽孝之教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-01190001-0074">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-01190001-0074</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 環流する民主主義

—メルヴィルの『タイピー』

竹内 美佳子

アメリカン・ルネサンスの文学は、アフリカ系アメリカ人作家エリソン (Ralph Ellison 1914-94) にとって創造力の源であった。南部諸州が人種分離政策を敷く20世紀中葉のアメリカにあってエリソンは、とりわけメルヴィル (Herman Melville, 1819-91) の文学を社会意識の支柱とした。「メルヴィルの作品はどのような事について著したものであれ、民主主義を扱う姿勢に揺るぎなかった」(Shadow and Act 40-41)。この評論原稿を書いたのは『見えない人間』(Invisible Man, 1952) 出版の6年前であり、エリソンはメルヴィルを強く意識して小説の執筆を開始したと考えられる。他方、メルヴィルの第一長編を同時代の黒人社会に紹介したのは、奴隷解放運動家フレデリック・ダグラス (Frederick Douglass, 1817-95) である。本論では、アフリカ系アメリカ人を触発するメルヴィルの民主主義精神を、自伝的第一長編『タイピー——ポリネシアの生活』(Typee: A Peep at Polynesian Life, 1846) に探る。

## I

『タイピー』の語りは、帝国主義の歴史を遡ることから始まる。ヨーロッパ人は1595年にマルケサス諸島の存在を発見した。スペイン人の航海者デ・メンダーニャは、パトロンであるペルー総督マルケス・デ・メンドサの位階を以て列島の名とした。米英戦争中の1813年には軍艦エセックスのポーター艦長 (David Porter) がヌクヒヴァ島を侵略し、港を「マサチューセッツ・ベイ」と名づけて征服の証とした (Typee 5-11)。「合衆国の共和政治は人類の理知と倫理の最高峰」

であり、「アメリカ人の支配者がマルケサス人の酋長である」とポーターは主張した。議会承認を経ているとはいえ、合衆国政府の名の下に砦を築いたことはアメリカ帝国主義侵略の始まりを意味した (Herbert 91-92)。

メルヴィルは1841年1月3日、捕鯨船アクシュネット号に乗り組み太平洋へ出航した。船はリオデジャネイロに到達する頃には150バレルの鯨油を積み、4月にホーン岬を周ってチリ沿岸を北上する。10月下旬には赤道を越えてガラパゴス諸島を視界に収めた。翌年6月には75バレルの鯨油を積み、200バレルをアメリカに別送した。船長は1842年6月23日、補給のためにマルケサス諸島のヌクヒヴァに停泊することを決める。タヒチの北東1190キロに位置する12の群島最大の島である。上陸したメルヴィルが目にするのは、フランスの国旗と軍艦だった。マルケサス諸島は3週間前、フランス太平洋艦隊のデュプティ・トゥール司令長官に接収されたところだった。

メルヴィルは同僚グリーン (Richard Tobias Greene) と密かに山岳へ向かう。従兄弟たちから捕鯨体験を聞いてはいたが、現実の苛酷さは想像以上であった。船長が食料を出し惜しみ、病者を放置し、暴君のように船員を扱う状況下、脱走はメルヴィルにとっての正当防衛だった。支配者の無法に無法を以て報いる奴隷の反乱にも一脈通ずる逃亡劇である。

食人種と称されるタイピー族に囲まれて4週間を送り、最終的に島を離れるメルヴィルは、オーストラリア捕鯨船に次の寄港地まで同乗を認められ、フランスの占領下にあるタヒチへ上陸する。そこからナンタケットの捕鯨船に乗りハワイへ向かう。ジェイムズ・クック (James Cook) が1778年に西洋人として初めて上陸したハワイ諸島は、19世紀当時カメハメハ王朝の治世下にあった。アメリカの交易商に天然資源を収奪され、1821年以降はキリスト教宣教師の支配するアメリカ植民地となっていた。メルヴィルはその後ホノルルからアメリカ海軍フリゲートに乗り組み、14か月の航海を経て1844年10月3日、ボストン近郊のネイヴィー・ヤードに帰還して海軍を除隊する。捕鯨船での出航から4年に及ぶ航海であった。

タイピー族との数奇な体験は衆人の注目を浴び、メルヴィルは帰国後まもなく第一長編の執筆に臨む。諸島を巡る航海が作家の世界観を形成したことは言を俟たない。南洋で目撃した帝国支配は、メルヴィルが帰国した時にはアメリカ大陸内部で同時進行していた。ポーク大統領は南西部に広がるメキシコ領土の収奪を画策し、南部プランター階級が領土拡張政策の推進力と化していた。領土拡張主

義者は「明白なる天命 (Manifest Destiny)」を掲げてメキシコとの戦争も辞さぬ構えだった。

## II

ヌクヒヴァ島に滞在した4週間を、小説『タイピー』は4か月に拡張する。南洋の文化に考察を加えるため、作家は時間の流れを必要とした。メルヴィルは島民に多様な美德を見出す。日常の些事から生まれる喜びが、「文明人」には経験し難い大きな幸福を島民にもたらしている (*Typee* 144)。奢り高ぶる者は一人もおらず、島民は総じて平等である。主人公は日々接していたメヘヴィが王者であることに、祭の時まで気づかずにいた (185-87)。南京錠は存在せず、島民は長槍や宝物を置いたまま戸を開け放って水浴びに出かける。

メルヴィルがとりわけ注目するのは、社会の安寧を維持するための法規則がまったく存在しないのに、公序良俗に反して断罪される者が一人もいなかったことである (200)。「野蛮な未開人」と称される人々がコモンローも裁判所も警察も権利証書も有さずに、これほど見事な社会秩序を具現できる謎を、メルヴィルは次のように推論する。

They [The Typees] seemed to be governed by that sort of tacit common-sense law which, say what they will of the inborn lawlessness of the human race, has its precepts graven on every breast. The grand principles of virtue and honor, however they may be distorted by arbitrary codes, are the same all the world over. . . . (201)

島民は「暗黙の常識法典」に統治されており、各の胸に戒律が刻み込まれているのである。美德と名誉の「大原理」は、恣意的な掟によっていかに歪められようとも世界あまねく同一であるとメルヴィルは述べ、島の自然に大原理の源を見出す。“I am half inclined to believe that its inhabitants hold their broad valleys in fee simple from Nature herself; to have and hold, so long as grass grows and water runs. . . .” (202) 島民は広大な谷を自然界から無条件に相続しているのであり、草が茂り川の流れる限り自然によって民は育まれる。かくてメルヴィルは、「自然の

法」と言うべき普遍の原理を島民の社会に読み取る。

タイピー族の特質としてメルヴィルが特記するのは、万事に示される「感受性の完全な一致」である。島民のあらゆる活動に「全会一致の精神」が顕現し、すべてが調和と善意のうちにとり行われる。たとえ部族の事案を話し合う大会を開催しても極めて短時間で閉会してしまうだろう、と主人公は想像する。メルヴィルの用いる「自然 (Nature)」、「全会一致 (unanimity)」、「大会 (convention)」という語は、アメリカ独立宣言と憲法制定会議を想起させる。「自然と自然の神の法」を謳うアメリカ独立宣言は、果たしてタイピー族が心に刻む「暗黙の常識法典」に勝るのか、というメルヴィルの問いが読み取れる。独立宣言の草稿は、英国王の始めた奴隷貿易に対する批判を含んでいた。しかし、大陸会議は「全会一致」の宣言を実現するために南部奴隷主勢力と妥協を図り、奴隷貿易批判を独立宣言から削除した。憲法もまた、奴隷制度を容認する南北妥協によって批准に至る。タイピー族の全会一致は「妥協」ではなく、「調和と善意」から巧まずして生まれることにメルヴィルは注目する。

帰国直前の1843年に起きたアメリカの奴隷船クレオール号の反乱事件も、メルヴィルの視野に入ったであろう。ヴァージニア沖で反乱を起こした奴隷は、バハマの港でイギリス当局に解放された。アメリカ側が奴隷の返還を求めるなか、下院議員ギディングズ (Joshua Giddings) はこう述べた。「船が奴隷制国家の領海を離れた瞬間に、奴隷は自然法のみが効力をもつ法域に出たことになる。」ギディングズはこの演説によって譴責処分を受けた (Cover 112-13)。『タイピー』は南洋の「自然の法」に照らして、アメリカ社会の欺瞞を浮き彫りにする。「自然が心に刻み込んだ法典」のもとに生きる姿に、メルヴィルは原住民の卓越性をみた。

「開化された白人が地球上で最も獐猛な動物である」とメルヴィルは述べる (Typee 125)。文明国は長所を分与すると同時に幾多の悪を抱え込み、人類に大量の悲惨をもたらしている。階級間対立、戦争を続ける執念深さは、文明のもたらす悪の典型である。メルヴィルは、人食い人種の谷を治めるメヘヴィの王権に心の中で「万歳」を唱え、タイピー族が「幸せな穢れなき未開の異教徒」であり続けることを願う (189, 181)。西洋列強の侵略が島民を残酷にしたのであり、「蛮人」と呼ばれる人々は文明国の残忍非道に激昂し、止むにやまれず暴力行為に及んだのだ (27)。歴史的記述は、西洋中心主義の虚報を多く含む。アメリカ人宣教師の著述には、邪神の祭壇に人間が生贄として供されるさまが頻繁に描か

れる。かかる描写は、キリスト教徒の功徳を強調するために原住民を貶める誇張なのだ、とメルヴィルは述べる(169)。

ホノルルでメルヴィルが目撃するのは、ニューイングランドから来た宣教師に福音を説かれ、家畜のように馬車の引綱に繋がれた原住民の姿である。安息日ごとにアメリカの礼拝堂前には数十台の馬車が並び、原住民が伝道師たちを邸宅へ曳いてゆく。遠隔の島で使徒を自任しながら不適格な者がいるなら、本国にも同様の聖職者が存在するのではないか(196-99)。南洋の帝国支配に対するメルヴィルの憂慮は、アメリカ本国の現実に差し向けられる。

### III

冒頭で捕鯨船を脱走した『タイピー』の主人公は一目散に山の頂へ登り、峡谷の底を見下ろす。「洞窟だか地下石炭貯蔵庫だか知らぬが、あの谷底に何を見つけようというのかね」と相棒トビーは躊躇する。これに対して主人公は、「踏み分け道が存在したからには谷底に見るべきものがあるはずであり、それが何であるか自分は見届けるつもりだ」と応じる(44-45)。二人の対話が想起させるのは、ラルフ・エリスンの『見えない人間』である。支配階級に翻弄された黒人青年は、ニューヨークの路上に口を開けたマンホールから、19世紀に建てられたビルの「地下石炭貯蔵庫」に転落する(*Invisible Man* 567)。白人居住区と黒人街ハーレムの境界にある地下空間への落下には、地理的かつ精神的な意味があるとエリソンは評論に述べる。主人公が落下するのは「下水道ではなく、地下石炭貯蔵庫という熱と光と動力の源であり、垂直落下は彼の動機と自己認識に連動しながら、自身の人間的状況を理解する上昇過程となる」(*Shadow and Act* 57)。

地下冬眠から覚める主人公は、「私を熊のジャックと呼んでもらおう」("Call me Jack-the-Bear")とプロローグに名乗る。「私の棲家を『穴』と呼ぶからといって、墓のように湿った冷たい所と早合点されては困る。穴には冷たいのと暖かいのがあり、私が居るのは暖かい穴だ。熊は冬籠りして生き永らえ、春には復活祭の雛のように殻を破って現れ出る」(*Invisible Man* 6)。書き終えた手記を携えて外界に上る決意をする主人公は、「古皮をこの洞穴に脱ぎ捨ててゆこう」とエピローグに宣して脱皮する蛇になる(581)。『タイピー』を誕生と復活の神話と呼んだD. H. ロレンスの形容は、『見えない人間』にもまさに相応しい。「相手

が破滅するまで『然り (Yes)』と「言い続けよ」という祖父の遺言を解き明かすことが、エピローグの核心である。アメリカ人が自ら生み出しながら冒瀆した「原理」を、解放奴隷の祖父が肯定し抜いた可能性を主人公は悟る (574)。原理 (principle) とは、「万人は平等につくられている」という基本理念と換言してよい。被抑圧民族が原理の守護者であるというアイロニーが、エリスンの「地下石炭貯蔵庫」から浮かび上がる。

メルヴィルをマルケサス諸島に導いたのは、鯨油という天然資源の交易を促す資本主義と帝国主義の動力だった。捕鯨船から脱走した主人公にとり、今やアメリカの船は自由の象徴ではなく、人間を閉じ込める悪の権化である。『タイピー』の脱走劇は、何者にでもなれるような開放感を夥しい落下感覚に表現する。急峻に隔てられた谷間を急降下する感覚を、メルヴィルはこう記す。“I scarcely knew whether I was helplessly falling from the heights above, or whether the fearful rapidity with which I descended was an act of my own volition.” (Typee 53) メルヴィルの描く谷底への移動は、下山というより落下に近い。垂直降下 (vertical journey)、垂直の崖 (perpendicular bluffs) という表現をメルヴィルは繰り返し、暗黒の洞窟への落下感覚を強調する (61, 64)。

Edward Sugden は、主人公の脱走劇に奴隷の逃亡を重ね読む。頂から谷底へ樹々を飛び降りる『タイピー』の主人公は、西洋人としての「社会的存在」から、生き残りをかけた「生物的生存」の次元に突入する。密林の砂糖黍に打たれる苦痛はブランテーションの鞭打ちを連想させ、港に停泊中の船に連れ戻される恐怖は逃亡奴隷の切迫感に重なる。山奥の闇と寒さ、飢えと孤独に包囲された極限状態にあって、既知の社会的アイデンティティを失う主人公には「無防備な動物的現実」だけが残される (Sugden 76-78)。主人公はヌクヒヴァ島の絶壁を垂直下降しながら、西洋近代の社会的基層の外に自らを放擲する。エリスンの落下は、メルヴィルの垂直降下と相似をなす。文字通り「地下石炭貯蔵庫」に着地した『見えない人間』の主人公は、自分を被支配階級と規定する人種主義の桎梏から解き放たれる。

#### IV

『タイピー』のアメリカ版は、イギリス版に修正を加えて 1846 年 3 月にワイ

リー・アンド・パトナム社から出版された。ワイリーは同年8月、さらに大きな変更をメルヴィルに求めて改訂版を出版する。宣教師と政治情勢に関する記述が全て削除されたのである(Howard 289-90)。第24章の宣教師批判を削除したのは、ニューヨークの『エヴァンジェリスト』(*Evangelist*, 1846年4月9日付)が酷評したためである。同紙の8月8日号は、黒人指導者フレデリック・ダグラスが当時イギリスで行っていた講演活動も攻撃した(Wallace 67)。メルヴィルとダグラスは宗教媒体で共に酷評を浴びたが、奴隷解放運動紙 *National Anti-Slavery Standard* (1847年3月27日号)においては同時に賞賛された(Levine and Otter 4, 446)。元逃亡奴隷のダグラスと並び立つ新進作家メルヴィルが、いかに急進的であったかがわかる。

ダグラスはイギリスの講演活動から得た資金で自らの自由を買い取り、1847年に奴隷解放運動紙 *North Star* を創刊する。同紙は1848年6月2日号に、『タイピー』第30章の冒頭3段落を“Tattooing”と題して掲載した。散歩中の主人公トンモが刺青の現場に遭遇する場面である。地面に仰向けになった男性に、刺青師が小槌と鑿で色素を刻印している。苦悶する男性に対し、彫師はキツツキの如く陽気に歌いながら鑿を振る。Elizabeth McHenryの指摘するとおり、『ノース・スター』は奴隷体験記を核とするアフリカ系の作品と併せ、注目すべきヨーロッパ系アメリカ人の作品も掲げた(123-24)。黒人と白人の作品を並置するダグラスの紙面構成は文化的ヒエラルキーを覆し、人種を超えて共有される創造力に光を当てた。

ポリネシアの刺青師が人体に刻む円や矩形や菱形は、西洋の人種学が人体を線分化したさまを彷彿させるとオッター(Samuel Otter)は指摘する(18)。欧米で1830年代から興隆する骨相学は、頭骨の計測値が脳力を示すと考えた。アメリカ学派がアングロサクソンを白色人種の頂点に位置づけ、さらに北米アングロサクソンをブリトン人に優位させるのは、1840年にかけてのことである。骨相学は人体を線分化して人種の優劣をつけ、アングロサクソンの植民地支配と北米大陸での西進を正当化した(Horsman 56-58, 126-28)。メルヴィルは主人公の白い肌を脅かす刺青師に、西洋の疑似科学がもつ暴力性を逆転させたとも解せよう。竹内勝徳が記すとおり、語り手トンモは「見る側＝語る側にいると同時に、見られる側＝語られる側にもいる」のである(122)。ダグラスの『ノース・スター』は、タイピー族の刺青場面をある種の痛快さを以て抜粋し、黒人読者の興味を喚



起したと推測できる。メルヴィルは刺青の脅威ゆえに島民と決別するのであるが、刺青の慣習が「永遠の安寧 (eternal welfare)」に不可欠の宗教性をもつことを、後の講演で明らかにする (“The South Seas” 419)。

エリスン『見えない人間』は、メルヴィルとダグラスをテキスト内部で邂逅させる。メルヴィル『ベニート・セレノ』の一節をエピグラフに掲げるこの小説は、第17章でダグラスの面影を蘇らせる。元逃亡奴隷のブラザー・タープが主人公に与えるのは、フレデリック・ダグラスの肖像画である。かくしてエリスンは、メルヴィルの反乱奴隷パボと逃亡奴隷ダグラスとが分かちもつ解放思想を、テキストに環流させる。タープはさらに第18章で、自分がかつて拘束していた足枷を主人公に贈与する。奴隷主に「否 (No)」と言ったがために足枷に繋がれたタープは、鋼の輪を19年間やすりで研いだ挙句に斧で叩き割り、ダグラスと同じように北への逃亡を果たした。エリスンは逃亡奴隷タープが抉じ開けた鋼の輪によって、20世紀の黒人青年をダグラスに繋ぎ止める。

メルヴィルは1858年12月から3箇月にわたり行う講演旅行で、聴衆の好奇心に応えつつも西洋文明に対する論難を展開した。「南洋の豊饒な大地と幸福な人々が、文明との接触に穢されることなく、その天真爛漫と美と純粹を保持することを祈る」と講演は表明する (“The South Seas” 420)。巽孝之が述べるとおり、メルヴィルは1861年3月22日、就任直後のリンカーン大統領と首都ワシントンで相まみえた。南北戦争後、メルヴィルは暗殺されたリンカーンへの鎮魂を “The Martyr: indicative of the passion of the people on the 15th of April, 1865” と題する詩に表現する (Tatsumi 104)。「思慮深く厳格な復讐者」とメルヴィルは奴隷解放者リンカーンを呼ぶ。帝国主義と奴隷制度に対する批判は『タイピー』に始まるメルヴィル文学を貫く思想である。民主主義を求めるメルヴィルの祈りは、アフリカ系アメリカ人の創造力に世紀を超えて靈感を与え、テキストに反響し続ける。

## 引用文献

---

Cover, Robert M. *Justice Accused: Antislavery and the Judicial Process*. Yale UP, 1975.

Ellison, Ralph. *Invisible Man*. 1952. Random House, 1995.

———. *Shadow and Act*. 1964. Random House, 1995.

- Herbert, T. Walter, Jr. *Marquesan Encounters: Melville and the Meaning of Civilization*. Harvard UP, 1980.
- Horsman, Reginald. *Race and Manifest Destiny: The Origins of American Racial Anglo-Saxonism*. Harvard UP, 1981.
- Howard, Leon. "Historical Note." Melville, *Typee*, pp. 277-302.
- Lawrence, D. H. "Herman Melville's *Typee* and *Omoo*." *Studies in Classic American Literature*. Thomas Seltzer, 1920.
- Levine, Robert S., and Samuel Otter, editors. *Frederick Douglass and Herman Melville: Essays in Relation*. U of North Carolina P, 2008.
- McHenry, Elizabeth. *Forgotten Readers: Recovering the Lost History of African American Literary Societies*. Duke UP, 2002.
- Melville, Herman. *Typee: A Peep at Polynesian Life*. 1846. Edited by Harrison Hayford, Hershel Parker, and G. Thomas Tanselle, Northwestern UP/ Newberry Library, 1968.
- . "The South Seas." *The Piazza Tales and Other Prose Pieces 1839-1860*. Edited by Harrison Hayford, Alma A. MacDougall, G. Thomas Tanselle, et al., Northwestern UP/ Newberry Library, 1987.
- Otter, Samuel. "'Race' in *Typee* and *White-Jacket*." *The Cambridge Companion to Herman Melville*, edited by Robert S. Levine, Cambridge UP, 2006, pp. 12-36.
- Powell, Timothy B. *Ruthless Democracy: A Multicultural Interpretation of the American Renaissance*. Princeton UP, 2000.
- Sealts, Merton M., Jr. *Melville as Lecturer*. Harvard UP, 1957.
- Sugden, Edward. "Marginal States: Herman Melville in the Marquesas, 1842." *The New Melville Studies*, edited by Cody Marrs, Cambridge UP, 2019, pp. 66-79.
- Tatsumi, Takayuki. *Young Americans in Literature: The Post-Romantic Turn in the Age of Poe, Hawthorne and Melville*. Sairyusha, 2018.
- Wallace, Robert K. *Douglass and Melville: Anchored Together in Neighborly Style*. Spinner Publications, 2005.
- 竹内勝徳 『メルヴィル文学における〈演技する主体〉』 小鳥遊書房、2020年。